

在日スーパーコレクター 河正雄

”全財産をはたいて日本中に散らばった私たちの魂を見つけた。”

[週刊朝鮮]イ・ドンファン記者

入力 2024.09.15. 05:40

去る 8 月 15 日の光復節から始まった政治圏一角の「反日騒動」が依然と続く中、一生集めた全財産を投じて、収集した美術品を祖国に持ち帰った在日コリアン 2 世の事業家がいる。解放前の 1939 年、日本の大阪で在日コリアン 2 世として生まれた河正雄(ハ・ジョンウン、85 歳)。これまで彼が国内に持って来た美術品だけで少なく見積もっても 1 万 2000 点余り、彼のコレクションには最近とてつもない高価を誇る在日コリアン画家李禹煥 (イ・ウファン)の作品など、貴重な作品がぎっしりずらりと並ぶ。これらの作品は彼の言葉通り、「日韓関係改善と在日コリアンの地位向上のために」、日本から韓国に送られたものだ。文化養成論を掲げる、老在日コリアンのもう一つの克日といえるだろう。

おかげで彼の両親が生まれた故郷である全羅南道靈岩(ヨンアム)には彼の名を冠した「靈岩郡立河正雄美術館」が造成されたし、2017 年には光州市立美術館が光州広域市西区にある旧全南道知事公館を美術館として造成し、「河正雄美術館」と命名した。

彼が寄贈した美術品は、量はもちろん、質的にも優れていると評価される。かつて仏門に帰依して、「弥勒菩薩」「百済観音」「阿修羅像」など仏像を描くのに卓越した腕前を誇る北朝鮮出身の在日画家である全和凰 (チョン・ファファン、1909~1996)を筆頭に、李禹煥、郭仁植(クァク・インシク)、郭徳俊(クァク・ドクチュン)、文承根(ムン・スンゲン)、宋英玉(ソン・ヨンオク)、曹良奎(チョ・ヤングユ)、孫雅由(ソン・アユ)など 在日コリアン画家はもちろん、ピカソ、シャガール、ダリ、アンディ・ウォーホルなど、世界の有名作家の絵も網羅している。東京の駐日韓国大使館には、彼が寄贈した孫雅由氏の作品が飾られている。彼はソウルの景福宮(キョンボックン)内の国立古宮博物館にも、大韓帝国の最後の皇太子である英親 (ヨンチン) 王と故李方子夫人の遺品 691 点を寄贈した。

特に、両親の故郷であり古代日本に千字文と論語を伝えた百済の王仁(ワニ)博士の故郷である靈岩には、彼が学生時代を過ごした秋田県の桜の苗木を送ったりした。東京王仁ライオンズクラブ(旧首都ライオンズクラブ)の会長を務めた彼は、2016 年東京の上野公園に王仁博士の銅像を建立する際には、「建立諮問委員長。」を務めた。

当時、小池百合子東京都知事から許認可を受けるなど、王仁博士を日本に「植える」ことに、全力を尽くした。韓日交流の象徴である王仁博士の肖像が刻まれた碑は、近くに立つ「征韓論」の主唱者である西郷隆盛が犬を連れている銅像と妙な対比をなしている。

去る8月29日に訪れた東京近郊の埼玉県川口にある河正雄先生の自宅。1点当たりのオークション価格だけで数十億ウォンに達する李禹煥画伯の作品など、1万2千点余りを国内外の美術館に惜しみなく寄贈した「スーパーコレクター」の自宅というので、絢爛豪華な規模の邸宅ときらきら輝く美術品を内心期待したが、彼の家は意外に素朴だった。

「河工房」という木彫りの表札が掛る自宅に入ると、応接室には亡くなった両親を祀る小さな仏堂と、韓国を象徴するムクゲの絵が掲げてあった。書斎のような空間には、各種美術書籍や在日コリアン関連の冊子がギッシリ並んでいた。居間の一角には、夫人の尹昌子(ユン・チャンジャ)さんが直接描いたという、茶紅色のスカートに五色のチョゴリを着た、上の孫娘の絵が掛かっていた。

2001年から光州市立美術館の終身名誉館長である彼とインタビューを行った、この8月29日は1910年に大韓帝国が日本に国権を奪われた「日韓併合。」が公布され、在日コリアンの「ディアスポラ」が始まった日でもある。ちょうどこの日、超強力な台風「サンサン」が日本列島に上陸し、東京と埼玉が最高の警戒に入った状態だった。

河正雄館長は「台風を突いて韓国からやって来た。」という記者の冗談に、「天には天の仕事、私には私の仕事がある。」と、「台風など全く気にしない。」と答えた。ちょうど川口市の自宅には、彼の一代記を執筆するために20年以上も追いかけてきたという埼玉新聞の日本人記者も一緒に来ていた。

- これまで美術品を何点、祖国に寄贈したのか。

「少なく見ても作品は全部で1万2000点余り、本と図録は2000点余り。光州市立美術館をはじめ、霊岩郡立河正雄美術館など韓国に13カ所、日本の10カ所に美術品を寄贈した。公立美術館に寄贈したものだけでも、この程度。他の場所に寄贈したものまで合わせると、もっと多いただろう。国立古宮博物館にも英親王妃李方子夫人の遺品691点を寄贈したし、新築された東京の駐日韓国大使館にも私が寄贈した作品が入っている。」

- なぜ、こういうことをするのか。

「在日コリアンの画家が描いた絵を買い集めると、最初はみな私を狂ったと言いました。ゴミのような作品をなぜ集めるのかと。他に野心があって、作品を買い集めて寄贈すると、私を罵る人もいたし、私に精神病院に入れと言う人もいた。それで一度、東京近郊の戸田にある精神病院を訪ねたこともある。日本人の医師に、なぜ来たのかと聞かれて、「理由を説明し、脳の検査をして欲しい。」と言ったところ、手振りでそのまま帰れと言われました。それからは、もっと自信を持って作品を集めた。」

- 美術品を集めるのに費やしたお金は、どれくらいになるのか。

「当時はまだ、美術品の価値を知らなかった時代だ。だから集めることができた。私が出した作品の中、在日コリアン画家李禹煥の絵もある。たぶん今、私の財産を全部売っても、李禹煥の絵は1枚も買えない。考えてみれば当時、私を狂ったと罵った人たちの方が、本当に狂った人たちだった。そのように絵を見分けられず、ゴミ扱いしたのだから、本当に狂っていたのではないか。」

- 莫大なお金をどうやって集めたのか。

「1963年に結婚して、川口で家電量販店をやった。翌年1964年に東京オリンピックが開かれると、カラーテレビが本当に飛ぶように売れた。当時はまだ、「月賦」という概念があまりなかったが、私は「月賦」の概念を導入した。例えば、40万円のカラーテレビを4万円ずつ10ヶ月、1万円ずつ40ヶ月の月賦で購入できるようにした。当時は家電製品が故障しやすい時だったので、近くによく知っている店で購入しなければならなかった。当時、在日コリアンをはじめ、多くの人たちが私の店に押し寄せて、運よくお金を集めることができた。」

- 家電量販店経営だけで、そんなに寄付ができるのか。

「休まずに働いていたら、一度風邪をひいた。風邪が5年近く続いた。それで、私が突然死んでも家族が食べていけるようにしなければと思い、土地を買い始めました。当時は日本の地価が今ほど高くなかった。カラーテレビと土地を交換しようという人もいた。それで東京、川口、大宮などの土地を買い集めた。ちょうど田中角栄総理が「日本列島改造論」を打ち出して、地価が高騰し始めた。母に韓国料理屋を営むために用意した東京赤羽の建物は、新幹線の鉄道敷地に収容され、莫大な補償を受けた。他の建物は現在も商店街や駐車場などとして利用されていて、ありがたいことに食べていくのに大きな問題はない。」

- 1939年に大阪で生まれたのに、なぜ秋田に行ったのか。

「秋田に母の親戚がいた。木炭などを掘る仕事をしていた。父はそこで馬丁として働

き、父母共に秋田県田沢湖近くの生保内(おぼない)水力発電所のダムと導水路の建設現場でも働いた。

- 両親はなぜ、戦後も日本に残ったのか。

「1945年8月15日の解放直後に帰国を準備し、布団や家財道具まで霊岩に送りました。しかし、帰国船の切符が買えなかった。金があつて裕福な人たちが、先に帰国船に乗った。私たちの家族は家財道具をすでに霊岩に送った状態で、帰国船の切符が手に入らず、無一文で日本に居残った。結局、秋田にいる母の親戚のもとに再び入った。たまたま親戚が、私の勉強まで面倒見てくれるというので。」

- 当時、高校に進学する余裕はなかったのですか。

「わが家の事情では、私は高校に行けなかった。当時、家と厩舎が一緒だったが、ある日、厩舎に馬が2頭いた。私を勉強させてくれると言っていた母方の親戚が、気が変わって父の代を継いで馬丁をしろと馬を用意した。それで学校に行つて高校に行けないと言ったら、先生が大泣きして『河君、絶対高校に行つて勉強しなさい』と促した。学校での出来事を家に帰つて説明すると、母は「高校は私が送つてやる」と言つて、米の密売に出かけた。」

- 米の密売をしたのか。

「日本の敗戦直後、物資が不足していた時。米の取引は、政府が厳しく管理していた。無許可での私人間の米の取引は違法だった。しかし、秋田の米はおいしいので、東京の高級レストランなどで人気があつた。在日コリアンも、米の密売を多くした。私の母は秋田から米を80kgずつ背負い、10時間かけて蒸気機関車に乗つて東京の赤羽まで行き、米を渡した。右手と左手に20kgずつ、40kg背負い、米を東京に運び、赤羽駅で引き渡した。密売の取り締まりが厳しく、警察署に捕まつたこともあつた。」

- そうして高校に送つたのに、絵を描くとなると母親は腹が立つたでしょうね。

「画家になろうとしたのでない。当時、絵を描いて食べていけないことは、自分でもよくわかつていた。ただ趣味で描いていただけなのに、母は私が絵を描くと、『お前は長男なのに、変人になろうとするのか』と、筆や絵の具などの画材をすべて川に投げ捨ててしまった。」

- 高校進学後はどうでしたか。

「私が出た秋田工業高校は名門高校だ。高3の時、他の友達とは5~6月頃、すでに就職が決まっていた。でも、勉強ができた私ひとりだけ、就職できなかった。その理由については何も言わなかったが、「朝鮮人」であることが足かせになった。それでどうせ

高 3 の時就職できなかったので、卒業証書にはそれまで使っていた「河本正雄」という日本式の名前の代わりに「河正雄」、国籍は「朝鮮」と書いてくれと言った。卒業証書を受け取ると家に帰らず、汽車に乗って東京に向かった。秋田は二度と帰って来ることも、見るのも嫌だった。」

- 東京で、どうやって職を探したのか。

「在日本居留民団(現民団)に私の事情を書いて、仕事を探してほしいと手紙を送った。おかげで東京で、在日コリアンが経営する『明工社』という電気会社に就職することができた。当時、日給は 260 円ほどだった。当時は最低賃金が 254 円だったと記憶している。それでも就職する時、社長に「これからはデザインが大事だ。」と言って、デザインをやらせてもらった。当時、月に 6000 円ほど稼いだが、3000 円は代々木のデザインスクールに通って学費に使い、残る 3000 円は交通費、食費などに使った。」

- 一時、朝鮮総聯に属したと聞いたが。

「1959 年、日本の歴史上最大の台風、伊勢湾台風が襲来した。川口の荒川堤防のそばに家があった。母親が米を売り渡していた社長が自分の土地の一部を、コメ代の代わりに譲り受けた家だ。ところが台風で荒川の堤防が決壊し、洪水が押し寄せ、家は床上浸水してしまった。その時、一隻の船が来て、救援物資をくれた。川口には同胞がたくさん住んでいて、朝鮮総聯が同胞を救援するために船を出したのだ。川口は江戸時代から、鋳物工業が発展したところ。6・25 戦争を前後して、鋳物工業が活況を呈していた。在日コリアンは、川口で鉄屑を回収して鋳物工場に売り渡す古物商をたくさんやっていた。」

- 在日同胞の北送事業の時、なぜ北に行かなかったのか。

「当時、昼夜を問わず働き、勉強していたら失明の危機が訪れた。母が米の代わりにもらった土地に用意した川口の家までも洪水で浸水し、何も残っていなかった。ちょうど 1959 年に在日同胞の北送事業が始まった。北朝鮮に行けば家もくれるし、勉強もさせてくれる、病気も治してくれるというので、北送船に乗ろうと川口の朝鮮総聯支部を訪ねた。すると、北にはいつでも行けるから、まずはここにいる同胞のために何か仕事をしてくれないかと言われた。たぶん、高校を卒業したからだろう。それで、川口の朝鮮総聯支部で事務員として働いた。」

- どのような仕事をしたのか

「政治的な仕事ではなかった。在日同胞のために商工業組合と衛生組合を結成し、納税や警察などを相手に法律業務を支援した。衛生組合は、在来式便所から糞尿を回

収する組合で、当時、北朝鮮や旧ソ連から銑鉄を東京の晴海埠頭に持ち込み、川口市にある鋳物工場に引き渡す貿易もしていた。6・25 戦争前後、川口市の鋳物工場は大好況だった。仕事を良くしたら、金日成の肖像画が描かれたバッジを 2 つももらった。」

- 朝鮮総聯とはなぜ決別したのか。

「結婚して新婚生活用に家電製品を買ったが、家電販売店の社長に詐欺に遭った。結局、騙されたお金の代わりに店を私の名義で引き継ぐことになり、朝鮮総聯の仕事はもうできなくなった。それで朝鮮総聯の仕事を辞めると言ったら、幹部たちがトイレで『あいつはスパイだ』と話しているのを、偶然耳にした。4 年近く同胞のために一生懸命働いた罪しかないのに、一瞬でスパイと罵倒され、とても衝撃を受けた。それで持っていた金日成バッジまで捨てて、朝鮮総聯に足を運ばなくなった。」

- 現在の国籍は何ですか。

「韓国だ。1965 年の日韓国交正常化の時、'朝鮮籍'のままにいるか、日本に帰化するか、韓国国籍を取得するか、3 つの選択肢があったが、私は韓国国籍を取得した。両親の故郷が全羅南道の靈岩だったので、特に迷いはなかった。」

- 解放後、初めて韓国を訪れたのはいつですか。

「1974 年頃です。馬丁として働いていた父はお酒を飲むと、是非故郷に行きたいと私にせがんだ。当時、事業でとても大変だったが、民団を通じて帰国旅券を貰い、解放後初めて韓国を訪れた。父は先祖の土墓の前で、子供のように大泣きした。その時、「もう少し、早く来ればよかった...」と後悔した。その後、靈岩に 600 坪ほど土地を購入し、先祖の墓碑を建て整理しました。」

- 在日同胞の地位向上に乗り出した理由は。

「秋田の自宅の隣に朝鮮人の無縁故の墓があった。両親は私が小学校に通っていたころから、石墓の前に食べ物を供えて祈りを捧げさせた。自分たちは怖くて行けないと言いつつ、幼い私を代わりに行かせたのだ。その時から生まれた「哀情心」ではないかと思う。田沢湖畔にある「姫観音像」が、生保内水力発電所と導水路を建設する際に亡くなった、朝鮮人強制動員労働者の怨霊を慰めるためのものである事実も、最終的に明らかにした。そして隣村にある、田澤寺に朝鮮人無縁仏慰霊碑も建てた。」

- 来年は解放 80 周年、日韓国交正常化 60 周年。両国に期待することは。

「私は 1930 年代生まれ、記者は 1980 年代生まれだが、繋がりがあつて物語が伝わる

ではないか。人間の歴史ということだ。メディアの役割が重要だ。『温故知新』という言葉がある。昔から私たちが生きてきた記録をよく発掘して、声もなく、言葉もなく埋もれていった人物を探し出し、そのような人から学ぶことが重要だ。」

- 特別な座右銘はあるか。

「『露堂堂』という言葉だ。『隠すことなくありのまま、堂々と表れる』という意味だ。この言葉は、解放前の日本の教科書に掲載された、安倍能成(日本の元文部大臣)が書いた『青丘(朝鮮の別称)雑記』の「浅川巧さんを惜しむ。」という文章にある。解放後、この文章は日本の教科書から消えたが、私が初めてこの文に接した時はとても感動した。「朝鮮の膳」「朝鮮陶磁銘考」を書いた総督府林業技師の浅川巧は、日本人として朝鮮を誰よりも愛した人だ。彼の墓はソウルの忘憂里(マンウリ)墓域にある。私も浅川巧のような人になりたい。」